

農作物技術情報 第5号 水稻

発行日 令和6年7月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 県全体の出穂期は平年より2日早い7月31日頃と見込まれます（7月21日現在予測）。生育ステージを確認しつつ、気象の変化に応じた栽培管理、防除を心掛けましょう。
- ◆ 向こう1か月の平均気温は平年に比べ高くなる予報であり※、登熟前半は平年に比べ高温で推移する可能性が高いです。出穂後20日間の最高気温が30℃以上、最低気温が23℃以上の場合、胴割粒・白未熟粒が発生し品質が低下するおそれがありますので、登熟期の高温に対応した水管理（間断かんがい、夜間入水など）を徹底しましょう。
- ◆ 斑点米カメムシ類の被害多発が予想されます。穂揃期1週間後の薬剤防除を徹底しましょう。
- ◆ 穂いもちの発生に注意が必要です。予防粒剤の散布の有無に関わらず、上位葉に病斑を確認した場合は、ただちに茎葉散布による防除を実施しましょう。

※ 東北地方1か月予報（令和6年7月18日発表，仙台管区気象台）

1 水稻の生育状況と出穂期の予測

- ・ 農業改良普及センター生育診断予察圃の幼穂形成期は県全体で7月9日頃（平年差－2日）となっており、本報の作成時点（7月21日）の予測では、出穂期は平年より2日早い7月31日頃と見込まれます（表1）。
- ・ 今後の栽培管理や防除にあたっては、例年どおりの暦に頼らず、実際の出穂状況をよく観察したうえで、適期を逃さないよう実施します。

表1 出穂期予測（農業改良普及センター生育診断予察圃）

	地帯名					品種名				
	県全体	北上川 上流	北上川 下流	東 部	北 部	ひとめ ぼれ	あきた こまち	いわて っこ	銀河の しずく	金色 の風
本年（予測）	7/31	8/2	7/31	7/29	7/28	7/29	8/2	7/30	7/30	8/2
平年	8/2	8/2	8/1	8/1	8/3	8/2	8/1	8/2	8/1	8/2
差（日）	-2	0	-1	-3	-6	-4	1	-3	-2	0

1) 出穂期：幼穂形成期の2024年実測値から、発育指数（DVI）とアメダス日平均気温を用いた予測式により推定。

⇒日平均気温は予測日（7/20）より前の期間は現況値、予測日以降は平年値を使用。

2) 県全体の数字は、各地帯の作付面積比による加重平均。

3) 生育診断予察圃における実測・予測結果であり、一般圃場とは移植時期や栽培管理の内容によって変動しうる。

2 登熟を低下させない水管理

(1) 出穂・開花期の水管理

この時期は、生育の速度が早く大量の水を必要とします。過乾燥は、穂の出すくみや開花・受精障害による不稔の発生を招くことがあるため、**湛水管理**（浅水でよい）を基本とします。

(2) 登熟期の水管理

向こう1か月の平均気温は平年に比べ高くなる予報であり、**登熟前半は平年に比べ高温で推移**することが予想されます。

登熟前半に高温（日中30℃以上、夜間23℃以上）が続く場合、登熟不良や玄米品質の低下（胴割粒や白未熟粒の発生）を招く恐れがありますので、かんがい水の状況に応じて以下の管理を実施してください。

① かんがい水を確保できる場合

- ・ **間断かんがい**を基本とし、湛水2～3日→落水1～2日程度とするなど、**水の入替頻度を高めて、水温・地温を下げる**とともに、根に酸素を与えて活力維持をはかります。
- ・ 間断かんがい中の管理の目安
湛水時・・・**水深3cm程度**
落水時・・・**滞水部が消失し、土の湿り気を目視及び触れて確認できる程度まで。**
(土壤表面の白化・亀裂が広がるほどの**過乾燥にはしない**)
- ・ **入水は夜間**に行います（水尻を止めて夕方から朝まで入水→その後、自然減水）。
- ・ 常時湛水管理は、根腐れや稲体の消耗をまねき、スムーズな登熟を阻害するので避けてください。

② 十分なかんがい水を確保できない場合

- ・ 間断かんがいを実施できない場合は、**土壤を常に湿潤状態（足跡に水が少したまる程度の状態）**に保ちます（図1）。
- ・ 土壤の乾燥は品質低下につながるため、実施には十分に注意してください。
(水持ちの悪い圃場などは特に注意)



図1 足跡に水が少したまる程度の状態

(3) 落水時期

- ・ 落水時期の目安は、**排水良好な水田で出穂後35～40日、排水不良田で30～35日**です。
- ・ 近年、登熟期間の早い段階から落水し、田面を乾燥させている圃場が増えています。極端な早期落水は腹白粒増加や千粒重低下、胴割粒発生の原因となるので避けてください。
- ・ また、直播栽培など、登熟の早い段階で用水の利用期間が終了する場合も、乾かしすぎに注意し、落水の目安時期まで水尻は閉じたままとしてください。

3 病害虫防除対策

(1) 斑点米カメムシ類・・・発生量「多」の予報

〔令和6年度病害虫発生予察情報 注意報第1号（県病害虫防除所 令和6年7月16日発行）〕

ア 薬剤防除（茎葉散布で行う場合）の適期は、穂揃期1週間後です。

地域一斉防除を行う場合の散布時期は、地域の圃場の半数が穂揃期に達してから1週間後を目安とします。



図2 出穂の様子



図3 穂揃期（ひとめぼれ）

※8～9割の茎で出穂、穂首はまだ完全抽出していない

- ・穂の先端（芒を除く）が少しでも抽出した状態を“出穂”といいます（図2）。
- ・出穂した茎の割合が40～50%の状態を「出穂期」、80～90%の状態を「穂揃期」（図3）といいます。

イ 被害多発の恐れがある場合（下記①②③）は穂揃期2週間後に薬剤を追加散布します。

〔穂揃期1週間後にジノテフラン剤を用いた場合、追加散布は穂揃期3週間後とします〕

- ① 近隣に出穂開花中のイネ科植物（特にイタリアンライグラス）を含んだ牧草地や雑草の繁茂地等があり、斑点米カメムシ類の発生密度が高いところ。
- ② 本田内にノビエ、イヌホタルイ、シズイなどの雑草が多発しているところ。
- ③ 割れ粳の出やすい品種（あきたこまち等）を作付けしているところ。



図4 シズイの花穂とアカスジカスミカメ成虫



図5 割れ粳と斑点米（矢印）

ウ 水稻出穂間際の草刈りは、カメムシを本田に追い込むので避けます。

草刈りを適期（水稻出穂15～10日前まで）に実施できなかった場合は、本田の薬剤散布（穂揃期1週間後）の後、1週間以内に草刈りしてください。

（２）穂いもち・・・発生量「やや少」の予報

〔令和６年度病害虫発生予察情報 発生予報第４号（県病害虫防除所 令和６年６月２７日発行）〕

ア 穂いもち防除は、出穂前の予防粒剤の施用、または出穂直前と穂揃期の２回の茎葉散布を基本とします。

イ 穂いもちの発生が多いと予想される場合は、以下の防除を行います。

- ・ 出穂後に降雨が続いたり、低温等で出穂期間が長引く場合は、出穂直前から穂揃期１週間後まで、７～１０日間隔で茎葉散布による防除を実施します。
- ・ 葉いもちが上位葉で多発している場合は、確認時に直ちに防除を開始し、穂揃期１週間後まで７～１０日間隔で茎葉散布による防除を実施します。



図６ 葉いもち病斑（左：急性型、右：慢性型）

（３）紋枯病・・・発生量「やや多」の予報

〔令和６年度病害虫発生予察情報 発生予報第４号（県病害虫防除所 令和６年６月２７日発行）〕

茎葉散布による防除は、穂ばらみ末期（７月末～８月上旬）に、畦畔際の発病株の割合（発病株率）が、早生品種で１５％以上、晩生品種２０％以上の場合に行います。



図７ 紋枯病

農薬の安全使用

- ・ 農薬は使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任をもって使用してください。
- ・ 他の作物に農薬が飛散しないよう注意して散布してください。
- ・ 養蜂（ミツバチ）への配慮
養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危被害防止を徹底してください。

4 刈取りに向けた準備

- (1) 7月21日現在での予測では、出穂期は平年より2日早いと見込まれるため、**刈取り適期も平年より早まる**可能性があります。
- (2) 出穂は年々早まるとともに刈取り適期も早まっていますが、実際の刈取り時期は早まっておらず、**刈遅れの傾向**がみられています。このため、近年は**高温登熟と刈遅れ**を原因とした**胴割粒や白未熟粒**の発生などによる**品質低下**が問題となっています。
- (3) 今後の気象経過及び長期予報に注意し、積算温度等の目安(表2)をみながら、**早い段階から刈取り時期の見通しを立てるとともに、乾燥調製施設の運用が円滑に行われるよう、稼働計画の策定や設備点検などの準備を進めておきます。**

表2 刈取り適期の目安(日平均気温の積算)

品 種 名	刈取適期(出穂後積算気温)
金 色 の 風	950～1,050℃
銀 河 の し ず く	950～1,050℃
ひ と め ぼ れ	900～1,050℃
あ き た こ ま ち	950～1,100℃
ど ん び し ゃ り	950～1,050℃
か け は し	950～1,050℃
い わ て っ こ	950～1,050℃
サ サ ニ シ キ	1,000～1,150℃
ヒ メ ノ モ チ	950～1,050℃
も ち 美 人	950～1,050℃

次号は8月29日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。